「武庫川国文」第 94 号　抜刷
令和 5 年 3 月 27 日　発行

2022 年度日本語教育関連活動の報告

野　畑　理　佳
上　田　和　子

2022年度日本語教育関連活動の報告

野畑理佳・上田和子

目次

はじめに
1．2022年度日本語教育関連プログラムの概観
2．資格関連科目における活動
2.1　日本語教育インターンシップ
2.2　学外日本語教育実習

3．交流会活動
3.1　海外日本語学習者とのオンライン交流会
3.2　国内日本語学習者とのオンライン交流会
3.3　日本語教育機関への訪問
3.4　日本語学習者の来訪
3.5　その他

4．卒業論文研究
5．考察　―成果と課題―
参考文献

はじめに

新型コロナウィルスの影響により、全面的に授業のオンライン化を余儀なくされた 2020年の春から約3年を迎え、教育現場は落ち着きを取り戻しつつある。教師も学習者も様々なオンラインの形態の授業や教育活動に慣れてきたことがその理由の一つである。そして2022 年度は様子を見つつ、再び対面での教育活動に戻していく試みを行う年となった。本学でも 2021年度に引き続き、講義科目の多くはオンライン（オンデマンド型）によって行い、演習などの少人数科目では対面あるいはオンライン（ライブ型）で教育活動を行ったが、緊急事態宣言の発出もなくワクチン接種も進んだ2022年度は、より対面での教育活動を行いやすい環境であったと言える。そのため、オンラインおよび対面の双方の特色を生かした教育活動を組み合わせて実施することとなった。

本稿では、武庫川女子大学日本語日本文学科における2022年度の日本語教育関連活動を記録し、その意義を把握し次年度以降への示唆を得ることを目的として報告する。

1．2022 年度日本語教育関連プログラムの概観

本学科では日本語教員養成課程として文化庁ガイドライン（2019）に基づいて科目を配置し、学生は資格取得に必要な 37 単位あるいは 45 単位以上を修得する。

表 1 は、本学科開講科目のうち、文化庁ガイドライン（前掲）に示された三領域五区分のうち、「教育に関わる領域」の「言語と教育」区分の必修および選択必修科目である。それらの科目の 2020 年から 2022 年度にかけての授業方式の変化をまとめた。

表 1　2020 年度から 2022 年度にかけての授業方式

科目名	履修	開講 学年・期	授業の方式		
			2020 年度	2021 年度	2022 年度
日本語教育学入門	必修	1 年 前期	遠隔オンデマンド	遠隔オンデマンド ＋遠隔ライブ	遠隔オンデマンド
日本語教授法	必修	2 年 前期	遠隔オンデマンド ＋遠隔ライブ	遠隔オンデマンド ＋遠隔ライブ ⇒対面	対面
日本語教材研究Ⅰ	選択必修	2 年 後期	対面＋ 遠隔ライブ	遠隔オンデマンド ⇒対面	対面
日本語教材研究Ⅱ		3 年 後期	遠隔ライブ	遠隔オンデマンド	遠隔ライブ
日本語教授法実習	必修	3 年 前期	遠隔オンデマンド ＋ライブ	遠隔ライブ ⇒対面	対面
日本語教育史	選択必修	3 年 後期	遠隔オンデマンド	遠隔オンデマンド	遠隔オンデマンド
日本語教育 インターンシップ		3 年 前期	遠隔ライブ	遠隔オンデマンド ＋遠隔ライブ	対面+遠隔ライブ+ 実習先訪問

※表中の 2021 年度の⇒は、緊急事態宣言の解除とともに方式が切り替わったことを示している。

表 1 に記載の科目はアクティブラーニングによる学びを重視する科目も多い。2020 年度は全面的に遠隔での授業形態を迫られたが、2021 年度は対面授業や遠隔ライブ型での授業方式を可能な限り取り入れ、質を確保できるよう試みた。2022 年度は昨年度に引き続き、本学では講義は遠隔オンデマンド型、実習や演習科目などは対面方式による授業が推奨されたが、これを機に完全に対面授業に戻すことのできた科目もあった。しかし、依然新型コロナウィルス感染状況は収まらず、遠隔 LIVE で参加できるよう配慮したり、欠席者用の課題を用意するなどの必要が生じ、対面授業といっても完全に以前と同じ環境で実施できたわけではなかった。例えば「日本語教材研究Ⅱ」においては、担当の加藤登紀先生によると、

当初対面授業を予定していたものの、感染者が複数出たため、受講者と相談し急遽遠隔ライブ型に切り替えることになった。しかしグループワークを取り入れ、希望者には対面で日本語教育の現場を見る機会を提供したとのことであった。このように、ウィズ・コロナの教育現場ではより授業方法に柔軟性が求められていると言える。そのような状況において進めてきた日本語教育活動について、次節では表１に示す資格関連科目における活動事例、続いて交流会活動について報告する。

２．資格関連科目における活動事例

2.1　「日本語教育インターンシップ」

2022 年度学外教育実習のうち韓国協定校での海外実習は取りやめとなったが、国内日本語学校における実習は対面で行うことができた。授業開始時に決まっていたのは、2020 年度、2021 年度に続き 2022 年も国内実習のみ実施ということだけで、その上で履修希望者を募った。第１回ガイダンスでは、表２のような内容を伝えた。（表２）。

表２　「日本語教育インターンシップ」授業ガイダンス

日程：2021 年 4 月 14 日（木）～7 月 28 日（木）1 限
授業方法：対面+Google Classroom による遠隔授業（オンデマンド＋ライブ）
学習方法：対面授業への参加→課題やりとり
教科書：資料を毎回 PDF 等で添付する。
評価方法：①各課の課題およびレポート ②実習先からの評価
受講生： 8 名
その他：オンラインによる交流会を企画中, 夏季休暇中に国内日本語学校での実習。

表３は当該科目で事前に提供した先行シラバスに、実際に行った授業内容を加えて整理したいわゆるプロセスシラバスにあたるものである。「オンライン交流会」は交流先を変えて行った。

表３　各回の授業内容

回	時	テーマ	内容
1	4 月 14 日	ガイダンス、日本語教師の仕事	日本語学校紹介動画視聴など
2	4 月 21 日	日本語教師の先輩に聞こう	ベテラン教師の授業ビデオ視聴など
3	4 月 28 日	日本語学校・支援の場・立場	初級対象、自己紹介スライドの作成
4	5 月 12 日	日本語のＥラーニング	グループワーク
5	5 月 19 日	留学生を迎えて	本学協定校からの留学生

6	5 月 26 日	教師の役割、先週の振り返り	韓南大学とのオンライン交流会とその準備 5/19, 5/23. 6/2, 6/3 から任意の 2 回
7	6 月 2 日	初級教材を分析する	E ラーニング教材分析
8	6 月 9 日	初級口頭練習の実際	交流会の振り返りと実習準備
9	6 月 16 日	授業の計画と教案	
10	6 月 23 日	中級の学習者	グループワーク、スライド作成など
11	6 月 30 日	インターンシップのこころ構え	
12	7 月 7 日	日本語学校での実習準備、教師の役割	
13	7 月 14 日	日本語学校訪問	大阪 YMCA 国際専門学校
14	7 月 21 日	実習の打ち合わせ、心構え（オンライン）	大阪 YMCA 国際専門学校担当講師と
	7 月 28 日	オンライン交流会（文化紹介）の材料	多言語小学生とのコミュニケーション
	8 月～ 9 月	学外実習	大阪 YMCA 国際専門学校
15	9 月 9 日	実習の振り返り（オンライン・ライブ）	実習受け入れ先講師とともに

この授業では、短い時間に多様な日本語学習者と日本語によるコミュニケーションのやり取りを経験した。日本語による交流会では、背景の異なる学習者と出会い、それによってどのような準備が必要になるか、実際の会話でどのような経験や気づきがあったかなど、交流会前後の授業内容も規定されることが多かった。韓国の大学生とは語彙や文型の調整などを意識する必要はなかったが、多言語社会の香港の小学生（５年生）とは、漢字や英語など日本語以外の共通言語や視覚情報をどのように活用できるかなど、学生自身の持つ複合的なコミュニケーション力をいかに発揮するかを考え実践する機会になった。

2.2　学外日本語教育実習

海外の学習者と日本語によるオンライン交流会の経験を複数回重ねた後で、日本語学校での実習に臨むことになった。受け入れ校の実習担当者により、実習参加者８名は２～３名で１組に分けられ、様々な学習者の実態を見学できるように配慮していただき、学習レベル、受講形式の異なるクラスに参加させていただいた。また、毎日見学記録を提出し、添削指導を受けた。表４は、実習後の参加学生の実習に対する所感である。見学中心ではあるが、学習者の実態だけでなく、教師の仕事ぶりに注目したコメント多い。また共通語の使用や学習者との折に触れたコミュニケーションにも目をやり、そのような教師の働きかけが学習者に与えている影響についても見逃していない。その点で、学内での座学とは本質的に異なる学びが実習期間中に繰り広げられていることがわかる。

表４　学外教育実習後のコメント

・これまで机の上でしか日本語教師の仕事を見ることができていませんでしたが、実際の現場を見学することができ、実際の学習者とも触れ合うことができてとても刺激を受けることができました。 ・学習者が躓きやすいところに関しても実習前より分かるようになり、授業をするときに気を付けるべきポイントに気づくことができました。 ・具体的に日本語教師という姿が今までイメージできていませんでしたが、実際に働いている姿を見て、生徒が日本語を話せるようになるやりがいを感じることができる、素敵な仕事だと感じました。 ・学習者が積極的に発言することが多かったのは、教師の方が積極的にコミュニケーションを取っているからだということに気付いた。 ・学習者たちは思いの外、母国語を休み時間や授業中わからないところが出た時に使っていたのが衝撃だった。日本語学校なので母国語はなるべく話さないという環境だと思っていた。 ・先生方はもう慣れているからだと思うが、標準語で何の違和感もなく学習者たちと会話をしているのをみて、自分もそのような訓練が必要だなと感じた。 ・チームティーチングが中心で、先生同士が入れ替わりで教えているので、引き継ぎでコミュニケーションを取りながら行うことがとても大切であり、大変なこともあるけれど前後を考えて授業を考えるのでとても鍛えられるのだと思いました。 ・日本語を母国語としない人々に日本語を教えるという日常では経験できない体験をすることが出来てとても勉強になりました。３日間とても楽しかったです。 ・もっと日本語教師の勉強を頑張ろうと思うことのできる良いきっかけとなったように思います。ありがとうございました。

３．交流会活動

3.1　海外日本語学習者とのオンライン交流会

コロナ禍においては交流会活動を対面からオンラインへと実施方式の転換を強いられたが、それによって海外の教育現場ともつないで活発に実施することができるようになった。上田・野畑（2021）では、同一の相手と複数回オンライン交流会を開催し、科目単位ではなく横断的な交流会企画に切り替えて実践したことを報告している。過去には授業科目ごとに交流相手を設定していたため、交流会にはその授業を履修する学生のみが参加していたが、オンライン交流会が複数回開催できるようになったことで、複数の授業の受講者が、他に授業のない時間帯に自身の都合に合わせて選択して参加できるようになったということである。表５のとおり、2022 年度前期は５回のオンライン交流会を科目横断的に実施し、受講者は一人あたり１～３回の交流会に参加することとなった。中には 5 回すべてのオン

ライン交流会に参加した受講者もいた。後期には単独の科目において、国内の日本語教育機関との交流を行った。

表５　2022 年度に実施したオンライン交流会の相手機関と実施科目

交流先機関 ＼ 本学科情報		科目横断的交流会（前期）					単独科目対応	
		①韓南大学校（本学協定校・韓国）				②SFA 英文小學	③AOTS 関西研修センター	⑤神戸医療未来大学
科目名・担当	日付	5/19	5/23	6/2	6/3	6/24	10/21	1 /20
演習Ⅰ	上田	○		○		○		
演習Ⅰ	野畑		○	○	○	○	○	
日本語教育インターンシップ	上田	○	○	○	○	○		
日本語教材研究Ⅰ	野畑							○

※表中「○」は参加を示す

表６は前期に科目横断的に実施した交流会の相手先の情報および本学科の学生に対する事前課題である。

表６　横断的交流会の相手先情報および事前課題

交流相手	交流相手の情報	本学科参加数	履修者への事前課題
①韓南大学校大学生	・中級～上級レベル ・「日本語会話」（2 年生）「実用日本語会話」（2・3・4 年生）「日本語プレゼンテーション」（3・4 年生）を履修する大学 2～4 年生、韓国語話者	延べ合計 50 名	5/23 「昼食」「お気に入りの物」の写真を準備 6/2 「お気に入りの物」「旅行の思い出」「出身の町」の写真を準備 6/3 韓南大学学生の作文（話題提起）に目を通しておく
	5/19　2 年生　13 名	9 名	
	5/23　2・3・4 年生　12 名	13 名	
	6/2　2・4 年生　19 名	18 名	
	6/3　3・4 年生　13 名	10 名	
②SFA 英文小学校	・未習～初級 ・小学 5～6 年生　34 名 ・広東語（第一言語）、英語（教育言語）、北京語（必修）	合計 14 名	・簡単な日本文化活動体験ができるようグループで資料を準備しておく。

以下、前期に実施した海外の教育現場との交流について記述し、3.2 においては後期に実施した国内の日本語教育機関との交流について報告する。

3.1.1　韓国　韓南大学校

韓南大学校（韓国・大田田広域市）は本学の協定校である。コロナ前までの十数年わたり本学科の日本語教育実習の受け入れ校であったが、2021 年度は国外での教育実習が中止となり、オンライン交流会という形式で交流が復活したという経緯がある。昨年度と同様に、

同大学で日本語授業を担当する松下由美子講師にご協力を仰ぎ、計４回の交流会を実施することができた。

オンライン交流会の時期は韓南大学校の学期末であり、夏季休暇前にあたる 5 月末に先方の授業時間帯に合わせて実施し、双方の学生は自宅や大学等からそれぞれ Zoom により参加した。

昨年度のオンライン交流会の事前課題では、一部に自己紹介シートを準備・交換しておき、日本語レベルをしたり相手への質問を考えておくといった活動を取り入れたが、今年度の事前課題は受講者がより能動的に交流会に参加できるよう、Show ＆ Tell のための写真を準備しておくという課題に切り替えた（表６）。韓南大学校の参加者は日本語専攻の学生も多数参加し、レベルも中級以上が中心であるため、本学科の学生にとっては進行や話題の管理が相手任せになることも見受けられる。「お気に入りの物」「旅行の思い出」「出身の町」といった写真は、自己紹介の延長として自発的な発言を引き出し、また話題のきっかけを作るという役割もあるため、活動として取り入れた。

実際の交流においては、写真を共有するための機器操作に少し時間がかかったり、話者が写真を共有してもすぐに共有をストップしてしまうことで、写真をよく見ないまま会話を進めるということもあった。その点は対面で行う Show ＆ Tell との違いである。しかしながら、オンライン交流に特有の「顔を中心に切り取った」画面でしか相手が見られない状況において、写真を共有することはお互いについての情報をより広く収集することにつながり、短い時間でも相手の印象の一端を形作るという意味では有効であった。また回数を重ねることで機器操作にも慣れ、写真を見せながら話すべきことや質問すべきことを想定できるようになった学生もいる。

また韓南大学校３・４年生が参加するプレゼンテーションクラスとの交流は、相手の授業方法に合わせ、①２名の発表者が自身が選んだテーマで短い発表（作文）を準備し資料を共有する、②２名が発表する、③グループに分かれ、発表者が準備した話題や質問について話し合う、といった手続きで進められた。発表のテーマはセレクトショップや食べ歩きといった身近なテーマであったが、本学の学生にとって韓南大学校の学生の日本語での活発なやりとりに参加することは大変な刺激となったであろう。交流会の振り返りにおいては「相手のほうがいきいきと話していた」「相手の日本語力に圧倒された」など相手に関する気づきのほか、「相手に寄り添った話題であれば話は盛り上がることがわかった」
「相手の国について調べておくことで会話が弾む」など交流という場のふるまいについての気づきが見られた。また、コロナによる影響で留学の機会が制限される中、韓国人学生にとっても、交流の機会を通じて自信を得る機会となったように感じられる。

3.1.2　香港小学生

香港の SFA 英文小学の生徒（５年生、６年生）との交流会は、隔年で行われていた同校の日本修学旅行の際に、武庫川女子大学を訪問し日本文化体験活動を中心として行ってい

た。しかしコロナ禍の中、旅行実施は困難となり、オンラインでの交流会の可能性を探ったことから、2021 年に続いて連続で 2022 年も実施できることになった。

韓国の大学生とは同世代の若者同士としての会話が成立するが、小学生との会話は非常に難しい。そこで、オンライン交流会では日本文化活動を実施するために、どのような準備が必要かディスカッションするところから始まった。オンラインでの文化活動として本学学生が選んだのは、「おりがみ、けん玉」などの日本の遊びと「じゃんけん、遊び歌」など、身体を使った活動である。交流会の前に、各グループでパワーポイントのスライドを作成し、また漢字が両者の共通言語のひとつでもあるため、英語や漢字をスライドに取り入れて参加者の理解を促した。

小学生との活動は、言語面での心配も多かったが、笑顔の中でおおむね順調に進んだ。また交流先の SFA 英文小学生も日本語での歌、スピーチを準備するなど、この活動への意欲と熱意が伝わった時間だった。

3.2　国内日本語学習者とのオンライン交流会

3.2.1　インドネシア人介護福祉士候補生

本交流は 3.3.2 に記述の AOTS（海外産業人材育成協会）関西研修センターへの訪問に先立って行われたオンライン交流であり、本学科の「日本語教授法実習」（３年・前期開講）担当の甲斐三五代先生のご協力のもと実現することができた。

本学科の学生がインドネシア人介護福祉士候補生と交流するのは初めての試みである。コロナ禍で日本語母語話者と直接話す機会が減ってしまうという現状は多くの日本語教育機関が抱える悩みでもあるが、一方で本学科の演習Ⅰ受講者（３年生）は、入学時から一斉にオンライン授業となった 2020 年度入学生であり、より多くの交流の場を提供したいという意向が一致して実現に至った。

当日はインドネシア人介護福祉候補生（以下、インドネシア人学習者）18 名が学ぶ教室と、本学学生８名（「演習Ⅰ」・野畑ゼミの参加学生７名および「日本語インターンシップ」参加学生１名）を Zoom でつないで行われた。インドネシア人学習者は教室内で４グループに分かれ、グループに一つのディバイスを設置して、メンバー全員の顔が映るように着席した。このように教室内で複数のディバイスを使用してのオンライン交流は、ハウリングやお互いの声が気になるなどの問題が生じやすいが、先方の綿密な準備のおかげで問題なく進めることができた。当日、本学の学生はブレイクアウトルームに２名ずつ入り、事前に準備しておいた若者が使う表現をいくつか PPT で紹介し、その後はグループで自由に会話を進めた。

本学の学生が見る画面では、ひとつの画面に複数の相手が映ることになり、やりとりが特定の人に偏らないか、その点について配慮した上で会話が進められるのか不安であったが、インドネシア人学習者はグループのメンバーと協力し合い譲り合って話すなどの工夫が見られ、打ち解けた雰囲気で会話が進んだ。日本人学生のふり返りでは、初級修了レベルと聞

いていたが、想像よりも流暢に話し意思疎通にはほとんど問題がなかったこと、インドネシア人学習者が積極的に質問し熱心に話を聞いてくれることで、途切れなく会話を続けることができたとのことであった。相手の日本語力や積極性に助けられての交流ではあったが、楽しくコミュニケーションができたという印象を持ったようであった。

交流の最後に、Web カメラで教室全体の雰囲気を見せていただいた。そのときに教室内のホワイボードにいくつもの漢字が書かれていたのを目にし、「(インドネシアの) 学生たちが書きました」と紹介を受けた。それはある日の日本語学習のほんの一場面を垣間見たに過ぎなかったが、そのような日々の努力の積み重ねによってこの交流会が実現していることを肌で感じる瞬間となった。本交流の事前準備の段階で、本学学生の参加者に対して介護福祉士候補生がどのような人材であるかを説明したが、交流会の最後にそれを少しでも思い出す機会となったのではないかと思われる。

3.2.2　日本の大学で学ぶ大学生

本交流は「日本語教材研究Ⅰ」(２年・後期) で行われた。「日本語教材研究Ⅰ」は表１に記載のとおり日本語教員養成課程の選択必修科目であり、受講者の多くは２年生前期に開講する「日本語教授法」に続き履修する。

本科目はもともと日本語学習者と交流するのではなく、現職の日本語教員を招き経験談を聞くといった活動を取り入れてきた。その活動も大変好評ではあったが、コロナ禍をきっかけに多様な学習者とのコミュニケーションを行う場を提供することの重要性を改めて認識し、昨年度に引き続きオンライン交流会を企画することとした。

交流相手は神戸医療未来大学人間社会学部経営福祉ビジネス学科で学ぶ留学生 15 名（ベトナム 11 名、中国２名、ネパール２名）であり、同大学の上田俊介先生のご協力のもと実施に至った。本学からは「日本語教材研究Ⅰ」履修者のうち 21 名が参加した。以下は準備段階および交流会時の活動である。

【準備段階】

・交流会時のグループに分かれ、顔合わせ
・当日の活動「お気に入りのもの」「お気に入りの場所」で使用する写真を選び、メンバー間でどのような質疑応答をするか想定
・相手に聞きたい質問を考えておく
・交流相手からの質問を連絡（Google クラスルームを利用）

【オンライン交流会当日】(Zoom)

1. 挨拶、説明
2. グループでのフリートーク①
   自己紹介後、「お気に入りのもの」「お気に入りの場所」の写真を見せて質問をしあう。

その後、フリートーク（自由に質問しあう）。

3. グループでのフリートーク②（メンバーを入れ替え、同様の活動）
4. 感想、挨拶

昨年度の同大学との交流会では、お互いに質問を準備し、事前に交換したうえで交流に臨むという流れであったが、今回は Show & Tell の活動を取り入れた。それは前期に実施した交流会と同様の利点があると考えたためである（3.1.1 に記述）。例えば、交流相手の学生の一人は「ランニング中に見た大阪の風景」の写真を見せてくれ、また別の学生は「自分で焼いたたこ焼き」の写真を見せてくれたという。それにより、単に「好きなもの」の情報ではなく、わずかではあるが、日本で何を感じながら生活しているかという日常や思いを知ることができる。そのことが、相手についての新たな発見を生むことにつながったのではないかと考える。

本交流にあたり履修者に指示したことは、一人ひとりの名前を呼び、「○○人」ではなく「○○さん」として話してほしいということであった。そのせいか、ふり返りの記述には「○○さん」という記述が多く見られた。そのような一人ひとりとの出会いにおける戸惑いや楽しさなどの感情が記憶として残されていくことが、交流の場を提供する意義のひとつでもあると考えている。

本科目は対面授業であったため、履修者にとっては対面での交流を期待していた可能性もある。しかしながら 3.4 に記述するような対面での交流会が実施できるのは、近隣の教育機関であることや、お互いの授業日程等を調整し、どちらかが訪問するだけの時間を確保できるようにしておくことが運営上の条件となる。オンライン交流会であればそのような制約を考えなくてもよいため、今後もこのような利点を生かした交流の機会を探りたい。

3.3　日本語教育機関への訪問

3.3.1　演習Ⅰ（上田ゼミ）と日本語学校訪問

演習Ⅰ（上田ゼミ）の 3 年生 10 名は、2022 年 11 月 10 日（木）午後、大阪 YMCA 国際専門学校を訪問し、日本語による交流会を行った。同校では 10 月生が来日したばかりで、新入生歓迎会の趣旨も込めた活動となった。交流会の流れは下記のとおりである。

- アイスブレーキング
- グループ別のフリートーク
- ゲーム（福笑い、すごろくなど）
- 写真撮影

3.3.2　演習Ⅰ・演習Ⅱ（野畑ゼミ）と AOTS 関西研修センター訪問

演習Ⅰを履修する 3 年生は、日本で初めてコロナ感染者が確認された 2020 年 1 月から数か月後に入学した学生である。慣れないオンライン授業とともに大学生活が始まり、人間関

係を築く多くの機会が失われたであろう。日本語教育機関への訪問もオンライン交流へと切り替わっていたが、演習Ⅰを履修する学生には画面を介してではなく直接のコミュニケーションを経験してほしいという思いもあり、今年度は日本語教育の現場に出向いての交流を企画した。そこでインドネシア人介護福祉士候補生（以下、インドネシア人学習者）が学ぶ AOTS 関西研修センターの矢島康江先生のご協力を得て、ビジターセッションの相手として本学の学生が３クラス（午前１クラス、午後２クラス）の日本語授業を訪問することとなった。実施時期は 3.2.1 に記載の交流会の約 3 週間後、11 月 12 日であった。午前は演習Ⅱ受講者（４年生）４名、午後は演習Ⅰ受講者（３年生）７名が参加したが、いずれの学年にとっても初めての訪問での交流経験となる。

事前準備として、午前のクラスは若者が使う表現、午後の１クラスで慣用句をいくつか紹介するため、わかりやすい例文を考えて紙に書くなどの準備作業を行った。また交流相手はすべてインドネシア出身ではあるが、その言語や文化の多様性について少しでも知る機会となるよう、インドネシアの地図や簡単な料理名、季節についての情報を配布し、当日それも持参して一人ひとりに質問を投げかけるように伝えた。

当日、午前のクラスはインドネシア人学習者 4 人ずつのグループに本学の学生が一人ずつ入り、午後のクラスは２人または１人ずつが入ることになった。交流後には「フレンドリーだったので非常に話しやすかった」との感想が聞かれたが、何かわからないことがあってもグループ内で助け合って会話を進め、またさまざまな質問を用意して日本人学生に聞いていたことで、いい雰囲気が生まれたようだ。午後のクラスにおいて紹介した慣用句はほとんど知っており、想定していた日本語力を超えていたが、インドネシア人学習者は会話中にも様さまざまなことについてノートにメモを取り、会話の中からも日本語を学ぼうという勤勉な姿勢が見られたこと、また休日も日本語の勉強に励んでいるという情報を得て、本学の学生はその意欲の高さに大変な刺激を受けたようである。またふり返りの記述からは、オンライン交流会での経験と比較すると、ジェスチャーをしたりすぐにスマホを見せたり絵を描いたりなどによって、コミュニケーションが円滑に進んだという印象を持っていた。

当日は交流会中や直後にインスタグラムを交換して談笑する姿が見られた。これも対面交流ならではの光景である。

3.4　日本語学習者の来訪

3.4.1　日本語学校で学ぶ留学生（日本語教授法）

日本語教授法科目（前期・２年生）では、神戸国際語言学院（西宮市）と数年にわたり交流会を開催してきたが、2020 年度は中止となり、2021 年度はオンライン交流会を実施した。今年度はどのような方法で交流を行うか先方と協議を重ねた結果、2 年ぶりに対面で実施することを決断した。実施日は 7 月 15 日であり、過去と同様に先方が本科目の授業時間に合わせて来訪する形で行われた。しかし、コロナ禍での開催であるため、2 年前までの交流とは全く同じというわけではなく、学内を案内する時間を短縮するなどの調整を行った。

以下が準備段階と当日のスケジュールである。

【準備段階】

・授業内で交流会時のグループに分かれ、メンバー間の顔合わせ
・当日の活動「日常で使うオノマトペ」の紹介のため、語彙の選定、例文の考案、練習方法を考え、用紙に記載。リハーサルの実施。
・相手への質問を準備し、クラス全体で共有

【交流会当日】

1. 交流会開始前に授業のない学生に協力してもらい、書道教室などを見学。
2. 交流会の教室に移動し、グループに分かれて着席。
3. 自己紹介の後、「日常で使うオノマトペ」をいくつか紹介。
   その後、フリートーク。最後に留学生の国の簡単なことばを一つ教えてもらう。
4. 留学生の代表挨拶、記念撮影。

当日の参加者は履修者 37 名と、留学生 11 名（中国、ベトナム）であった。実は予定ではその倍以上の人数の留学生が来訪する予定であったが、交流会直前に体調不良の学生が出たため、念のため多くが来訪を辞退されることとなった。そのような直前の変更はあったものの、交流会自体は大変活発な雰囲気で楽しむ様子が伝わってきた。履修者である２年生も、前年度は多くの授業をオンラインで受けてきた学生たちである。人の少ない校舎に日本語を流暢に話す留学生が訪れ、顔を合わせてお互いの趣味や日常について質問しあうといった機会は新鮮であっただろう。

学生のふり返りのコメントには、お互いに分かりあいたいという前向きな気持ちでコミュニケーションができたといった態度面や、相手の日本語力が想像より高かったためつい自身の話すことばに注意せず、友達に話すように話してしまったといった言語面などが書かれており、気づきもさまざまであった。対面交流ではあちこちから笑い声が聞こえてくるなど周囲の情報も伝わってくることで、オンライン交流とは異なる雰囲気で進められた。そのことも多様な気づきを生み出すことにつながっている。

今回の交流について協力を得た相手校の渡辺茜先生は本学科の卒業生である。現場で活躍する卒業生を受講生に紹介できたことも成果であった。

3.4.2　外交官公務員

国際交流基金関西国際センターで実施する日本語研修「外交官・公務員研修」参加者との交流も、3.4.1 に記載の交流と同じく、コロナ前には年末年始の時期に対面で交流会を実施してきた交流相手のひとつである。当該研修は約８か月間の日本語研修であったが、昨年度はオンラインコースに変更され、期間も約３か月間と縮小されていた。そのため交流会もオ

ンラインで開催した。しかし今年度は訪日研修が復活したとの情報を得て、先方の岩澤和宏先生と相談の結果、対面での交流会を復活させることとなった。

交流会は冬季休暇中の１月７日に本学で実施した。交流会の概要は以下のとおりである。

【参加者】

当該研修参加者（各国若手外交官・公務員）22 名

（国籍はインドネシア、マレーシア、モルディブ、ラオス、ハイチ、タジキスタン、モンテネグロ、イラン、エリトリア、シエラレオネ、セーシェル、チャド、中央アフリカ、リベリア、トンガ、トルコ、ギニア、ボツワナ、モザンビーク、コモロの 20 か国）。

本学演習Ｉ（上田ゼミ、野畑ゼミ）、日本語教育インターンシップ履修者　計 21 名

【準備段階】

演習Ｉ（上田ゼミ）の参加学生は交流会参加予定者の国・地域を分担し、各国の言語や地理といった一般情報についてそれぞれ調べ、冊子にまとめた。データは交流会前に本学参加者に共有され、当日冊子が配布された。

【交流会当日】

１．全体で挨拶
２．グループでの会話（自己紹介、国の紹介など）
３．グループでの文化活動（書道、剣玉、福笑い、すごろく、坊主めくりなど）
４．外交官公務員研修代表挨拶、記念撮影

当該研修参加者は来日後３か月に満たない段階での交流であり、日本語のレベルはまだ初級である。そのため英語と日本語を織り交ぜての交流となった。また本交流では言語のやりとりだけではなく活動として、書道の体験や、剣玉や福笑い、坊主めくりなどのゲームをグループ単位で行いコミュニケーションのきっかけとした。

このような文化活動やゲームを取り入れるのは、単に言語を使ったやりとりが難しいからというわけではない。交流は相手と時間と場を共有することであるが、そこに活動やゲームを取りいれることで新たなコミュニケーションが生まれ、そこに楽しいといった感情が付随する。また書道の筆を使って書くことには大変興味を示し、家族の名前に漢字を当てはめて書いてみるといったことにも挑戦していた。本学学生は漢字を紹介したり手本を書いたりなどを通じて体験のサポートを行った。

本学学生にとっては、交流相手が職業を持つ社会人であり、多様な国・地域からの参加者であること、また英語を併用しながらの交流であることが初めての経験であり、戸惑いを覚えた学生もいるだろう。しかし相手の日本語力に助けられながらの交流とは異なり、自身の

コミュニケーション能力や態度についてさまざまな気づきが得られたのではないかと思われる。交流のふり返りには、コミュニケーションの時に相手の目を見るか見ないかといった単純ではあるが重要な文化的な違いが存在することや、全員が一緒にできる活動をすることが大切であるといったコメントが見られた。

3.5　その他

前期のゼミ活動では、オンラインを中心に日本語学習者との接点をもつことができた。2022 年は、国際交流基金関西国際センターより「移動ゼミ合宿」の企画が持ち上がり、夏季休暇中を利用して、上田ゼミ生（３年生、４年生、院生）合計 16 名で１泊２日の合宿を行った。活動内容は下記のとおりである。

移動ゼミ合宿
１）日程：2022 年 8 月 19 日（金）・20 日（土）１泊２日
２）人数：16 名
３）内容：金曜日--日本語教育専門家によるレクチャー
①「やさしい日本語」について
②関西国際センターの E-ラーニングプログラム
土曜日--「先輩に聞く」をテーマに就活や日本語教師の仕事について
グループ活動
懇親会

３年生だけでなく、学生生活の大部分をコロナ禍に支配された４年ゼミ生も積極的に参加の意向があり、また院生も参加することで、普段なかなか接点のない他学年と懇談することもでき、さらに日本語教育専門家によるレクチャーを受けるなど、大変有意義な時間を過ごすことができた。今後もゼミ活動として実現していきたい。

４．卒業論文研究

二つの日本語教育ゼミでは、４年生 20 名が卒業論文を提出した（2023 年 1 月 12 日、13 日）。過去２年間は卒業論文口頭発表会をオンラインで実施したが、状況を鑑み、2022 年度は対面で実施した（2023 年２月９日）。

卒業論文のテーマとしては言語（働く女性を表すことば、関西弁、言語の消滅、広告における表現など）、日本語教育、英語教育、メディア、文化に関するものが見られたほか、社会的なテーマを選んだ学生もいた。そのうちの一人は外国人に対する偏見をテーマとして取り上げている。卒業論文指導を行うなかで、アンケート調査と学生自身の交流経験のふり返りを含む構成となったが、その交流経験のふり返りは大学時代に経験した交流会が中心であり、それはまさに筆者たちがさまざまな授業において提供してきた機会であった。彼女

はそのひとつひとつの機会について、時には自身が書き残した気づきを引用しつつ、ふり返りを記述したのである。彼女の卒業論文では「出会い」が果たす偏見低減への役割についての考察が書かれているが、そのナラティブからは、日本語という言語を介した出会いと経験が積み重なり、新たな認識が動的に形成されていくことが感じ取れ、そのような場を探り提供してきたことの意義を感じずにはいられなかった。交流の場は一過性の楽しい、あるいは混乱するような経験で終わる可能性もあるが、多様な相手とことばを通じてやりとりする経験を重ねることが、それ以上の価値を生み出すのだと考える。

５．考察　―成果と課題―

2022 年度の交流会はオンラインによるもの、対面によるものを組み合わせて行われた。昨年度がすべてオンラインによる交流会であったことを考えると、対面での交流会が復活することで、改めて対面交流の良さを実感することができた。オンライン交流会は遠方の相手と気軽に交流できるという利点があり、複数回企画することも可能となる。しかしながら、機器の不具合などのトラブルや、音声が聴きとれない、顔が見えにくいというように聴覚情報や視覚情報が欠けることで、相手との心理的距離が縮まりにくい環境になることがある。また相手の表情が硬いときや沈黙は相手を不安にさせる。一方、対面での交流は相手の表情や行動がよく見え、理解できないときに筆談したり仲間うちで助け合ったりなど、コミュニケーションを円滑に進めるための方法がいくつも取られやすい。また、交流会の後には打ち解けた雰囲気で、楽しそうに写真を撮る場面や連絡先を交換する場面を目にすると、余韻が大切なものだということを教えてくれる。今年度はオンライン、交流それぞれの良さを生かした交流会が実現できたと言えよう。

来年度、政府は新型コロナの感染症法上の分類として、2023 年５月８日より季節性インフルエンザなどと同様の５類に切り替えるということがメディアで報道された。いよいよアフターコロナの段階に足を踏み入れたということであろうか。今後はこれまでの経験を踏まえ、オンラインおよび対面双方の利点を生かしつつ、参加者全員にとって交流の場が豊かな経験となるよう、工夫していなければならない。

参考文献

上田和子・野畑理佳（2021）「2021 年度前期　日本語オンライン交流会活動の実践」『武庫川国文』第 91 号

文化庁（2019）「日本語教育人材の養成・研修のあり方について（報告）改訂版」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf（2023 年 1 月 20 日アクセス）